



いつわりの仮面

川端 康浩

川端皮膚科クリニック院長

「痒くて死にそうです！」という患者に「痒みだけで死ぬわけじゃないですよ」といいました。「先生、わかりますか？ 痒みは痛みよりつらいのです！」と迫る患者には「骨を折ったことないんですか？ 骨折した直後にそれがいえれば上等です」といい返しました。それに対して、患者はとくに語気を荒げることもなく「そうかな〜？」と納得しました。それどころか、「先生にはかなわないなあ〜」と笑顔に変わる人さえいます。もちろんこれは気心の知れた患者との会話です。さすがの私も、初対面の患者にこんな無礼なことは申しません。患者との人間関係が十分に熟してきたと判断したときに、しかも内心少しハラハラしながら申し上げています。しかし、実際には私の返答内容にも一理あるわけで、いい方は別にして、こうしたことをはっきりいうこともときには診療上必要なことだと思っています。

慢性疾患の治療では、医師として相当厳しく患者の性格そのものや日常生活に立ち入らなければならないことがあります。患者にとっては余計なお世話、ときに耳の痛い忠告、指導(むしろ干渉?)が有効に作用するためには医師―患者間の強固な信頼関係の構築が不可欠です。そのためには相手(患者)が自分(医師)をどう思っているのか、何を求めているのかを正しく把握する必要があります。

おおむね患者はわれわれ医師に自分の理想の人間像を求めています。私は診療に当たっては、患者の望む人間像を演じようと思っています。あるときは

なんでも話せる親友。またあるときは頼れる先輩・兄貴。できのいい息子。物わかりのよい父。恋人と夫以外はなんにでもなる覚悟でいます。

以前、若手アカデミアの先生からいわれました。「開業医とは大変ですね。そこまでして患者のご機嫌をとるのですか？ まるで男芸者ですね」と。そのときは「こいつ、横っ面引っ叩いてやろうか」と思いましたが、開業して18年、いま「決して人気稼ぎのために、患者に迎合し、媚びへつらっているのではない。患者との強固な信頼関係の構築のために必要なことで、これこそ皮膚科臨床医としてのプロ意識である」と自信をもっていえます。

しかし、こうして患者に仕立てられ、祭り上げられた人格を演じ続けていると、否が応でも「実際の自分はどうか？」という自らの本質に迫る疑問にさいなまれます。

「自分はウソをついたことはないのか？」「友を裏切ったことはないのか？」「父や母に親孝行してこれたのか？」「家族にとって良い夫、父でありえたのか？」

現実の自分とのあまりに大きなギャップに責められ、苦しくなります。そして、この偽善の仮面を自ら剥ぎ取ってしまいたいというどうしようもない衝動に、ときどき駆られることがあります。